

前編  
ハイスペック社長が、Sな愛玩管理。  
地味な人妻OLの私が、  
デス・コンティニューでククメリに震える  
キツイ連続アキラに震える

ある会社の一室から、ひっそりと明かりが漏れていた。

「……はあ」

深夜二十二時半。

誰もいなくなったオフィスの片隅で、私は、ため息を漏らす。  
虚しく響くキーボードの音だけが、静かなフロアに溶けていく。  
オフィスの蛍光灯は間引きされていて、私のデスクの周りだけが、  
闇の中にぽつんと浮かぶ孤島のように白く照らされていた。

私の人生……、それを一言で言えば「地味」だ。

地味な顔立ちに、流行り廃りとは無縁のオフィスカジュアル。三年前、職場で紹介された真面目だけが取り柄の夫と結婚したが、生活はとつくに冷え切っている。夫は現在、長期の海外出張中。たまにかかってくる電話は、他愛もない連絡事項のようなもの。

「そっちは雨？ こっちのホテルは冷房が強くてさ」

そんな、まるで会社の業務連絡のような味気ない会話ばかりだ。私の身体を強く抱くことなんて、もう一年以上もなかった。

家でも、会社でも、遊びでも。誰からも、必要とされていない。ただの背景として、灰色の毎日の中で息をしているだけだった。

そして。

孤独な夜になれば、私は唯一の楽しみのようにスマホを開く。こつそり、誰にも教えていない鍵付きの裏アカウントを開いて、もう……誰でもいいから、私をめちやくちやに壊してほしいの。人妻の私を、一人の女として、そして、メスとして狂わせて。と、ドロドロとした本音を吐き捨てる夜を明かす。

……それが私の、気を紛らわす、唯一の自慰行為だった。

「間宮さん。まだ残っていたのか？」

いきなり背後からかけられた、私の鼓膜を心地よく揺らす声に、肩がビクツと跳ね上がる。振り返ると、そこに社長が立っていた。

「た、高崎社長……！ はい、明日の朝一番の役員会議の資料を、今のうちに揃えておこうと思ひまして……」

心臓が、嫌な音を立てて早鐘を打ち始める。

「深夜まで、本当にお疲れ様だね」

「いいえ……」

高崎社長は二代目でありながら、会社の業績を倍に伸ばした、文字通りの完璧なハイスpek男だ。芸能人並みの端正な容姿。仕立ての良い一分の隙もない、糊が効いた三つ揃えの高級スーツ。切れ長の瞳。私のような地味なOLとは住む世界がちがう。

ただ……。

世界が違うはずなのに、最近私は、社長に違和感を感じていた。

社内ですれ違ふたびに、社長の鋭い視線が、じつと私の胸元や、タイトスカートの、脚のラインを射抜いているような気がして、ずっと怖かった。でも、気のせいだと思おうとしてた。

だから思わず、少し引いてしまう。

いや……きっと自意識過剰なんだ。私みたいな地味な人妻が、彼のような男の目に留まるはずがない。

「ちょうどいい。ならばその資料を持って、社長室へ来なさい。少し確認したいことがある」

「えっ……あ、はい！」

私は思わず、大きな声を出してしまった。

彼は私の返事を待たずに、踵を返して歩き出す。

カツンカツン！

社長の高級な革靴の音が、なぜか私の気持ちに逆撫でしてくる。

でも、社長からのお声がけに、不思議な期待も抱いていた。

慌ててプリントアウトしたばかりの、まだ温かい書類を抱え、彼を追いかけた。重厚な木目の扉が開かれ、私は生まれて初めて、最上階にある社長室へと足を踏み入れた。

「失礼します……」

静かに扉が閉まる。その瞬間、カチャリと鍵が回る金属音が、静まり返った室内に不気味に響いた。

「あの……社長??」

「書類は、そこに置いてくれ」

高崎社長は大きなデスクに腰かけ、ネクタイを少しだけ緩めた。いつもならば、絶対に崩すことのない鉄仮面のような無表情が、いまは、獰猛な肉食獣のものに変貌している。その鋭い視線が、私の怯える顔から、ブラウスの第一ボタンの隙間からのぞく鎖骨、そして細い太ももへと、ねっとりと言うように動いた気がした。

「毎夜、鍵付きの裏アカで、淫らな妄想を呟いているね」



！？

「っ！？ な、なんで、それを……っ！」

頭を、強く殴られたような衝撃だった。

サーっと血の気が引き、抱えていた書類が私の手から滑り落ち、バサバサと床に醜く散らばる。誰にも、教えていないはずだった。ネットの海の片隅に吐き捨てていた、ドロドロとした本音の言葉。

それを、なぜこの男が知っているのか。

「なぜ、だと？」

社長は、デスクからゆっくりと立ち上がり、回り込んでくる。怯えて後ずさりする私の一步一步を、逃がさず追い詰めるように、距離を詰めてきた。私が見上げる社長の瞳には、狂気にも似た、ドス黒いまでの執着が渦巻いている。

「あんなことを考えていたとはね」

「あ、あの、いえ……あれは……」

「思わず、読みふけてしまったよ」

答え合わせが出来てしまった。彼が、私をじっと見ていた理由。酷い性癖を綴ったSNSを見て、私をそういう目で見ていたのだ。

「違うんです」

「違わないだろ。あれを見つけた時、私は本当に興奮したよ」

そんな事も知らないで……、私はバレないと思って書いてた。

「あの……あの……」

取り繕おうとしても、頭が真っ白だった。

「その地味な仮面の下で、どれほど淫らな声を上げて鳴くのか。私がどれだけ長い間、お前を手に入れる機会を窺っていたのか」

「そんな……っ！ ストーカーみたいな……」

背中が冷たい壁にぶつかった。逃げ場はない。

高崎社長の長い指先が、私の顎を強引に掴み上げ上を向かせた。指の力が強くて痛い。

「ストーリーカー？ 心外だな」

「……」

「お前の夫は、こんな怯えた、今にも泣き出しそうな可愛い顔を、一度でも見たことがあるのか？ ……いや、ないな。あの無能は、お前という極上の玩具の、本当の価値に気づいていない。だから、私がすべてを奪い、管理してやる。お前の身体も、心も、絶頂も、お前のマンコから出る汁の一滴まで、すべて私が管理してやる」

「や、やめてください。何を言っているんですか？」

「あのアカウントを、スクショしてある。晒してもいいんだぞ」

「やめて！」

抗議の声は、強引に塞がれた。

社長の唇が、私の唇を貪る。香水の匂いが鼻腔を突き抜けた。拒絶しようと、彼の胸を両手で強く押すが、ビクともしなかった。彼の激しい舌が、乱暴に私の口内を容赦なく蹂躪し歯列をなぞり、下品な音を立てて啜り上げていく。

んちゅ。ちゅぶ。ちゅぱ。

「んむ……ん、んうう……ッ！ は、あ……っ」

息ができないほどの濃厚な口付けで、脳がマヒしていく。

社長の手が、私の仕事着のブラウスを容赦なく引きちぎると、ボタンが床に転がる音が響いた。衣服の中に社長の手が侵入し、私の柔らかい胸をブラジャーごと驚掴みにする。

「あっ！ そんな！」

「思った通りに、いやらしい身体をしているな。お前の乳首も、こんなに硬くなってる」

「あ、はあ……ダメ、です……私、結婚してるのに……っ」

ブラウスを乱暴に剥ぎ取られ、ブラジャーを露わにされた私は、

そのまま大きなオフィスデスクの上へと強引に押し上げられた。冷たい木目の感触が背中に走り、ゾクツと身体が震える。

「ばらされなくなったら、抵抗するなよ」

社長は必死の抵抗を意に介さず、スカートのファスナーを下げ、ストッキングごと下着を一気に足首まで引きずり下ろした。

「あぁっ！ 見ないで、明るいところで、見ないでくださいっ！」

恥ずかしさで顔を覆おうとするが、両腕が社長の片手によって、頭の上へと完全に押さえつけられ拘束されてしまう。

見られてる……社長に……あそこを……。